

教師の学び

センター協力研究員（群馬県総合教育センター指導主事） 懸川 武史

事例研究の視点に、治療、援助における対象と研究者の“関係”を欠くことはできない。学校教育に転じてみると、子どもまたは保護者に問題行動のメカニズムを求めているケースが多い。ある学校で、教育相談について教師の自己理解から援助・指導を始めることを提案したところ「初めての観点ですね」と言葉が返ってきたことを思い出した。子どもとの信頼関係が確立しない問題を子どもの側にあるようにとらえられる危惧を感じた。

面接室には、コミュニケーションを共有する者同士で“物語”を編んでいく関係がある。編むことは、人の生き方に既存のカテゴリーを押しつけて理解するのではなく、カテゴリーが構築された過程を理解し、オートクチュール (Haute couture) 化を図ることである。その過程で、互いが自己に問い共有する者同士の成長に、真の学びがみられる。

私たち教師は子どもとの関係の中で、何を学んで来たのかという問いは、“学力問題”においても同様である。子どもの学力問題は教師の資質能力の問題と一体化している。

ある宴会の席のことである、ここはお決まりの上司の話が酒の肴になり、

「A□長は、初めに言っていたことが途中で変わるから、仕事をやっていて、ここまでと思うとまた前にいってしまって、終わった気がしないんだよね。」

「そうそう、これでいいかなと考えていると、ゴールが変わってしまって、エンドレスの感じで、いつ

も、より良いものを求めているから……。」

同席の素面には、A□長があるべき姿で、会話をするふたりに変わるべき教師の姿をみたように思える。

私たち教師は何処かで、目標を設定、実施し、評価を得る、直線的な“スタイル”を身に付けている。一度設定した目標を予定通り実施し、良い評価を得る過程では、途中での変更が評価を下げることになる。いつしか内容よりも実施することに意義を置き換えてしまう。期間限定のハードル越えという専門種目である。

学校教育の営みにおいて直線的なスタイルは、情報を獲得し、そのまま放出する一方的なコミュニケーションにより成立してきた。ハードル越えの専門種目は評価の後に、考える作業を取り入れる。欠落しているのは、子どもとの関係の中で学び成長することである。

変化よりも安定を求め、心の揺れからの逃避により問題の原因を他に置く流れを無意識のうちに成立させているのではないだろうか。

小生にとっての学力問題への急務は、教師としてのライフステージの課題を、過去の教育改革の変遷において、子どもとの関係の中で何を学びどのような資質を獲得できたのか、自身に問うことにある。ゆとりの時間、合科・総合の学習法、観点別等の評価法、校内研修のPDSモデルに始まり、教育相談での学びをとおして、学力問題における教師の意識改革の在り方を浮き上がらせたいと考える。